



俺 0 0 0 1 2



book-fukunokami

醤油の御煎餅

「俺も御醤油の御煎餅を食うんだ」

俺は一人で叫んだ。

いや、猫がいた。

俺は一匹の前で叫んだのであった。

「御醤油の御煎餅が食べたいよう食べたいよう」

俺は無性に御醤油の御煎餅が食べたくなった。

「だ、だめだ、御醤油の御煎餅を買いに行く気力がわかない」

どうやら気力がわかないゆえの御醤油の御煎餅食べたさらしい。

「御醤油の御煎餅を食べないと俺は気力がわかないはずだ、だが、しかし、気力が無いので御醤油の煎餅を買いに行く事ができない」

へたへた。

「どうしよう、どうしよう」

「ニュー」

猫が鳴く。

「おや、君は、ニャー、ではなく、ニュー、と無く猫なのかい？」

「ニュー、ニューニュー」

そして猫は去って行った。

俺は御醤油の御煎餅を食べたくなりながら寝そべっていた。

しばらくすると猫が御醤油の御煎餅屋さんの美人店員さんを連れてきた。

「あ、御醤油の御煎餅屋さん、御醤油の御煎餅を一つ売ってください」

「じゃあ、取りに行ってきます」

御醤油の御煎餅屋さんの美人店員さんが御醤油の御煎餅を取りに行った、猫もついて行った。

そして、1時間がたった。

「えーん、えーん、御醤油の御煎餅が食べれないよう、御醤油の御煎餅が食べれないよう」

俺は半泣きだった。

そこへ、美人店員さんがもう一人の美人店員さんと俺の身長と同じ直径の御醤油の御煎餅を持って現れたのであった。

「こんな大きいの一人じゃ食べれないよ」

「じゃあ、みんなで食べましょう」

「ニュー」

俺のおごりだった。

みんなで楽しく食べた。